
ハルケギニアで逞しく生きていく

望

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハルケギニアで逞しく生きていく

【Nコード】

N3463Q

【作者名】

望

【あらすじ】

初めての作品です。

よくある転生ものです。

不定期ですがなにとぞよろしくお願いします。

終わりそして始まり（前書き）

駄文で短いですがよろしくお願いします。

終わりそして始まり

？
(アレ・・・ココドコダ？)

気がついたら俺は、真っ赤な空を見ていた。

？
(イヤ・・・マツカナノハオレカ・・・)

視界がボヤけてるが俺の全身は血まみれだった。

正直な話、何がどうなってこんな事になったのか
思い出せない。
ただ一つ解るのは、このままだと俺は、死ぬと
いう事だ。

？
(アア・・・シヌノカ・・・オレハ・・・)

正直、死ぬとわかってても何
の感慨も沸かない、とかかひどく眠い、面倒臭い、どうでもいい。

？
「まあ・・・いいか・・・お休み・・・

」

そう、呟いて俺は目蓋を閉じた。

? (んん・・・)

気だるげに目蓋を開けて最初に目にしたものは知らない天井だった。

? (ここは・・・)

頭がボーッとして上手く思考が働かない。

? (確か・・・俺は・・・血まみれで・・・)

ようやくやっと思考が働きかけてきた。

? (そうだ・・・俺は・・・死んだんだ・・・ン・・・
という事は・・・ここは・・・あの世か)

そう思いながら俺は周囲を見渡そうとしたが上手く身体が動かない。

? (あれ・・・どうなってるんだ?
体が思うように動かない)

身体が動かない事を不思議に思いながら俺はふと、視線を横に向けたら一枚の鏡があった。鏡の中には一人の赤ん坊が写っていた。

？（エ・・・？）

どうゆう事・・・）

鏡の中にはエメラルドグリーンの色をした瞳の赤ん坊一人しかいなかった。

俺は鏡に向かって、手を振った。すると鏡の中の赤ん坊も手を振った。まさか・・・と思い自分の手を見た。

以前と比べて随分と小さくなっていた。まるで赤ん坊の手のように。

？「アギヤー！「うぁー！」」

俺は思わず悲鳴をあげてしまった。しかもでたのは赤ん坊の声だった。そりゃ誰だって青年がいきなり赤ん坊になってたら悲鳴の一つや二つあげるだろう。一体・・・なんで・・・と混乱していたら一人の女性が部屋に入ってきた。

年の頃は二十代前半か十代後半である。とても美しく金色の髪と自分と同じエメラルドグリーンの瞳をしていた。

女性「あらあら、起きてしまったのね」

その女性はきれいな声でやさしく俺に声をかけながら抱きしめあやした。

女性「ごめんなさいね、一人ぼっちにしまっって」

混乱の極みに達しているともう一人金髪の二十代後半の男性が部屋

に入って来た。

男性「なんだ、ジェラルルが起きたのか？」

女性「ええ、そうよ、あなた」

？（エ・・・？

エ・・・？

ジェラルル？

それって俺の事か？）

ただ、ただ混乱するばかりで何もできない状況で《これは夢だ》と
内心自分に言い聞かせた。

状況確認（前書き）

短くてすみません。

状況確認

ジェラール「ン・・・ふぁ・・・」

眠たい目をこすりながら大きなあくびをして俺は起きた。ベッドから出て窓を開け大きく体を伸ばす。頭をかき、一言呟く。

ジェラール「やっぱり夢じゃないんだな」

昇りかけてる朝日を見ながらため息一つついて、今までの出来事を確認、整理する。

どうやら俺は転生したらしい、しかも前世の記憶をもったまま、最初は全く信じられなかったが・・・認めざる得まい。

まあ、輪廻転生なんてものが無神論者の俺に本当にあるものかどうかはわからないが（しかも、前世の記憶持ちで・・・）

ただ、前世の記憶の中でも欠落しているものがある。

それは自分や家族、友人、周囲の人間の名前や顔だ。

思い出そうとすると霧がかかったように思い出せない。

自分の今までの人生は思い出せるのに自分や周囲の人間の名前や顔が思い出せない。

だから、これは記憶というよりも知識みたいに感じられる。

転生してから俺は情報収集を行なった。

情報収集といっても赤ん坊の俺にできる事なんてたかがしれてる。

周囲の人間の話を聞く事ぐらいだ。

3年間、情報収集した結果分かったことは、ここが地球じゃないこと、夜空を見上げると月が二つあった。

しかも異様にでかく赤と青の二色だ。

この双月を見た俺の感想は、（まるで、キン○マだなあ・・・）だ。

この世界はハルケギニアという地球でいえばヨーロッパに酷似している。ハルケギニアは大きく分けて5つの国がある。

浮遊大陸のアルビオン王国。

軍事国家の帝政ゲルマニア。

魔法先進国の大国ガリア王国。

宗教国家のロマリア連合皇国。

そして俺の生まれた国、伝統と格式を誇る小国トリスティン王国だ。

東にはエルフが住む砂漠の世界サハラとさらに東にはロバ・アル・カリイエと呼ばれる世界があるようだが詳細はわからない。

北、西、南、に至っては全くわかってない。この事からわかるようにこのハルケギニア（世界）は俺のいた世界に比べ随分、文明が遅れている。

せいぜい中世ヨーロッパぐらいだろう。

現代日本で生きてきた俺には正直キツイ。今まで科学文明に頼ってきたのに野生生活とまではいかないがそれでも電化製品など文明機器がないのは哀しい。まあ、この世界に生まれて愚痴っても仕方ないのだが・・・そのかわりこの世界には魔法がある。

まるでゲームやおとぎ話のようだが実在する。実際に両親が使った見せた時は驚いた。

この魔法は系統魔法といい王族、貴族が使う。他にも先住魔法という亜人や幻獣が使うものがある。あと虚無と呼ばれる失われた魔法があるが詳細はわからない。

系統魔法は火、水、風、土の4つに分かれている。どうやら俺にもその系統魔法が使えるらしい。なぜなら俺は・・・そこまで考え

部屋のドアがノックされた。

状況確認（後書き）

なんか説明ばかりでした。

貴族の家ゝ其の一ゝ（前書き）

頑張ります。

貴族の家ゝ其の一ゝ

？「おはようございます。ジェラルル様。起きておられますか。」

ドアの向こうでノックをして声をかけられ俺は思考を現実に戻した。
気づけば時計は7時をまわっていた。

随分長い間、思考に浸っていたなと思った。

？「ジェラルル様。起きておられますか？」

二度目の呼びかけがした。

ジェラルル「ああ・・・起きてるよ」

俺は仕方なさに呼びかけに応えた。

？「失礼します」

そう言って部屋に入って来たのは、アッシュブロンド色の髪を後ろでたばね、ブルーの瞳をした一人のメイドだった。

俺はそのメイドを見て渋い顔をした。

別にこのメイドが嫌いな訳じゃない。

このメイドは見た目も美人でスタイルも良く道歩きたいの男はその容姿で後ろを振り返るだろう。

俺のように渋顔になる事はまずない。

何故、渋顔になるかというと・・・

？「さあ、ジェラルル様、洋服に着替えましょう」

ジェラルル「・・・一人で着替えられるからいいよ、ヴィクトリア」

ヴィクトリア「そうはいきません。これも私の仕事です」

ジェラルル「いいって・・・」

ヴィクトリア「私が旦那様と奥様に叱られます」

・・・これだ、この性格、この融通のきかない性格だから渋顔になるのだ。別に嫌いな訳じゃない。ただ、苦手なのだ。

ジェラルル「・・・じゃあ、服を着た後、変な所がないか、それだけチェックしてくれ」

ヴィクトリア「しかし・・・」

ジェラルル「ヴィクトリア、俺もいつかは自立しなければならぬ。いつまでも人に甘えてはいられない。わかるだろ？」

ヴィクトリア「・・・わかりました。ジェラール様がそこまでおっしゃるなら譲歩いたしましょう」

・・・着替え一つするのに譲歩するって、内心呆れながら着替えようとした。

ヴィクトリア「あつ、ジェラール様」

ジェラール「なんだよ？」

ヴィクトリア「着替えの前にお顔をお洗いたします」

ジェラール「・・・」

その後もどっちが顔を洗うか言い合いをした。

ヴィクトリア「・・・ジェラール様は変わっておられますね」

着替えてる最中唐突に聞いてきた。

ジェラール「何がだ？」

ヴィクトリア「普通、貴族の方はご自分で顔をお洗いしたり、服をお召しになられたりしません」

ジェラルル「・・・」

ヴィクトリア「それ以前にそのお歳で他者に甘える事もなく、自立しようとしてらっしゃる」

ああ、そうだなと適当に相槌を打った。

実際、前世を含めて20年以上生きている俺に子供のように甘えろというのは酷だろう。

ヴィクトリア「それに、物心がおつきになる前のジェラルル様は、ほとんど手間をかけられませんでした。

玩具などでお遊びになられず字の読み書きなどご勉学に励んでおられました」

そう、俺はこの3年間情報収集だけではなくこの世界の文字を勉強した。最初は絵本など簡単なものを読んだり紙に字を書いて練習したりしていた。

ただ、疑問に思ったことがある。それはこの世界の言葉がわかることだ。生前ヨーロッパ方面の言葉は何カ国はわかったがこの世界の言葉が何故わかるのかが疑問に思っていた。まあ、答えのない疑問

をいつまでも思っていて仕方ないので考えるのを止めた。
ちなみにハルケギニアの文字はアルファベットを崩したような文字
なので憶えやすかった。

赤ん坊の頃、手間がかからなかったのは夜泣きもせずぐずることも
なく駄々をこねることもなかったからだ。

空腹の時は口をパクパク動かし、トイレの時は小は股間を大は尻を
叩いた。時間切れでスパークキングしてしまったこともあったが・・・
俺は基本、笑ったり、泣いたりしなかった。だから両親や使用人に
無愛想な子供と思われている。

無愛想といえはこのメイドのヴィクトリアも全く表情を崩さない。
俺を含め周囲の人間は皆、鉄仮面だと思っている。別にヴィクトリ
アのせいで無愛想になったわけではない。転生してからこうなのだ。
生前、愛想が良かったかどうか憶えてないが・・・

ジェラルル「・・・何が言いたいんだ？」

俺は、これ以上詮索するなという意味を込めて言った。

ヴィクトリア「いえ・・・出過ぎたことをお聞きしました」

言葉の意味を悟ってかそれ以上何も聞いてこなかった。俺は、一言
いや・・・気にしないでくれと言った。

丁度、着替えも終わり朝食を摂るため俺達は、ダイニングルームに
向かった。

貴族の家ゝ其の一ゝ（後書き）

もっと速いペースで書きたい。

貴族の家ゝ其の二ゝ(前書き)

駄文です。

貴族の家ゝ其の二ゝ

ダイニングルームの扉に着くと、白髪の初老の男性がいた。歳は50をいくつか過ぎた頃だ。執事長のジェームスだ。

ジェームス「おはようございます。ジェラルル様」

ジェラルル「おはよう。ジェームス」

ジェームス「旦那様と奥様は既に中でお待ちになられています」

そうか、と愛想が無くそっけない俺の返事を気にしたふうも無くダイニングルームの扉を開ける白髪の執事長はこの家に務めて30年以上にもなる。先代の当主から仕えているので現当主の父やその妻である母それに使用人達にも信頼されている。俺もその信頼ぶりを実務能力、人を観る目等を見て彼を信頼している。今の俺の無愛想でそっけ無い態度に対しても俺が不機嫌や不快感を抱いているわけではなく俺が普段からこうゆう人間だと解っているからだ。

ダイニングルームの中に入ると父と母が食卓の席についていた。上座に座っているのが父のアルベルトだ。金髪碧眼の青年で今年30歳だ。

その右隣に座っているのが母のアリシアだ。父と同じ金髪だが髪質は全然違う。母の髪はまるで金砂のように美しく輝いて見える。瞳はエメラルドグリーンで宝石のようだ。容姿からすれば某騎士王のアル○リアに似ている。現在21歳。

アルベルト「おはよう。ジェラルル」

アリシア「おはよう。ジェラルル」

父と母が俺に微笑みながら挨拶した。

ジェラルル「おはようございます。父上、母上」

俺は変わらず無愛想な顔をしながら挨拶を返した。それを見て両親は苦笑した。父も母も俺が笑わないのを知っているので苦笑するしかなかった。俺が赤ん坊の頃からほとんど感情を表に出さないので両親は困り果てていたが今は、もう慣れたのか苦笑するだけだった。

さすがに俺もそれを気にして鏡の前で無理矢理笑顔を造って見たが・
・・・・顔面神経痛みたいに顔がひきつった顔になったのですが
に止めた。ただ、まずいことにそれをメイドのヴィクトリアに視ら
れた。ヴィクトリアは変わらざるの鉄仮面のような無表情で一言「ジ
エラル様、気持ちの悪いことはやめて下さい」と。
転生してからあの一言程、俺の心に暗い影を落としたことはなかつ
た・・・

あの時のヴィクトリアの瞳は今でも忘れられない。表情こそ無表情
だがまるで可哀想な生き物を見るような目をしていた。
俺は、その日、一日中落ち込んだ。

俺はあの時の暗黒の出来事を思い出しながら席に着いた。

アルベルト「ジェラルよ。頼むからもう少し子供らしく愛想良く
笑ってくれんかね？」

アルベルトは、ジェラルが席に着くなり小さくため息をつき困っ
たような顔で尋ねた。

ジェラル「はぁ・・・努力はしているのですが・・・（父上、頼
むからさっきの暗黒の出来事を思い出させないで下さい）」

アリシア「ウッフ、仕方ありませんわ。あなた。この無愛想な所も

ジェラルルの個性ですし、なにより可愛いじゃないですか」

ジェラルル（・・・母上、個性はわかりますが無愛想を可愛いというのは・・・）

母は、他人と、どこかズレた価値観を持っていた。

アルベルト「いや、確かに可愛いんだがな」

ジェラルル（可愛いのか、父上）

アルベルト「しかしだな、アリシア。ジェラルルはいずれこの家を継ぐ次期当主なのだぞ。このままでは、社交界にも出られんぞ」

アリシア「ウッフ、ジェラルルもいずれ可愛いらしい笑顔を見せてくれますわ。ネッ、ジェラルル？」

ジェラルル（母上、それは、一生無理でしょう・・・）

ジェラルル「父上、母上、そのことはともかく、早く朝食にしまし
よう。料理が冷めてしまいます」

俺は無理矢理、話を終わらせた。これ以上、この不毛な会話をした
くなかったからだ。

アルベルト「そうだな、私もいずれジェラルルが笑ってくれるのを
期待しよう」

アリシア「ウッフ、そうね」

ジェラルル（しつこいし、無理だ！）

この無意味な会話を終わらせ3人は食事の前の始祖ブリミルへの感
謝の祈りを捧げた。

ジェラール（この食事前のお祈りもどうも馴染めないな）

ジェラールは食事前のこのお祈りがあまり好きではなかった。

現代日本人で無神論者のジェラールは神に祈りを捧げる行為がどうしても理解できなかった。神仏の類いに対して信仰することは悪いとは思わないし、侮蔑するつもりもない。ただ、本当に理解できないのだ。始祖ブリミルに感謝の祈りを捧げるなら、食材や料理を作った料理人に感謝をしたほうがいいんじゃないかと疑問に思う。

お祈りを終わらせ食事到手をつけようとしたが・・・

ジェラール（・・・朝からこの食事の量、それに油っこさ・・・）

ジェラールは食事の内容を見て顔をしかめた。朝食にしてはあまりにも多すぎる量と豪華過ぎる内容・・・

確かに人間にとって朝食は大事だが限度がある。顔をしかめているとアルベルトが声を掛けてきた。

アルベルト「どうしたジェラール？食べないのか？」

ジェラルル「父上、あの・・・朝食にしてはあまりにも量が多すぎじゃないですか？しかも油っこいものばかり・・・」

アルベルト「そうか？私はそうは思わんが」

ジェラルル「俺には、ちよつと・・・」

アルベルト「フム、ならば無理して食べず、残せばいい。なにも全て食べることはない」

ジェラルル「ですが、それではもったいないですし、料理を作ってもらった料理人に申し訳ないです」

アルベルト「だが、貴族たるもの常にこのぐらいの見栄をはらなければならぬ」

ジェラルル「客人が来るなら見栄を張る必要もあるでしょうが家族だけなら張る必要ないと思いますか？」

アルベルト「フム・・・」

アルベルトは、少し考え頷いた。

アルベルト「そうだな・・・（最近、懐も減り始めてきたしな・・・）ジェームス、明日から料理の量を減らせと料理長のデニスに伝えておけ」

ジェームス「かしこまりました」

ジェラルド「あと、野菜物と青魚を増やしたほうがいいと思います。肉類ばかりだと栄養が偏り健康に悪いです」

アルベルト「わかった。ジェームス」

ジェームス「かしこまりました」

アルベルト「しかし、お前は本当に変わっているな。ジェラール」

アリシア「そうね。とても3歳児には見えないわ」

ジェラール（・・・転生してますから・・・）

アルベルト「ま、だからこそ今日、お前に杖をプレゼントしようと思ったんだがな」

ジェラール「杖ですか？」

アルベルト「ウム。本当はあと2、3年待ってから渡そうと思ったんだがお前なら大丈夫だろう」

ジェラール「俺にも魔法が使えるでしょうか？」

アルベルト「勿論だ。お前は、《ローザリア伯爵家嫡男ジェラール・ド・ローザリア》なのだからな」

貴族の家ゝ其の二ゝ（後書き）

なかなか上手く書けない。

杖との契約ゝ其の一ゝ（前書き）

文才が欲しい・・・

杖との契約く其の一く

朝食の後、俺は父の執務室に赴いた。杖の契約をするためだ。

ジェラール「父上、ジェラールです」

ドアをノックし呼びかけた。

アルベルト「入れ」

ジェラール「失礼します」

執務室に入るとテーブルの上に様々な形の杖があった。

指揮棒のような杖、150センチ程のスタッフの杖、レイピアのよ
うな軍杖、木で、できたメイス、槍状の杖、その他各種様々な杖が
所狭しとテーブル上に並んでいた。

アルベルト「どうだ、ジェラール？これらの杖は、代々、ローザリア家の当主達が契約し使用してきたものだ」

ジェラール「色々ありますね」

アルベルト「ウム、メイジは、まず先代達が使ってきた杖と契約しなければならぬ。そこで自分と相性の合う杖と契約する。杖との相性は本人にしかわからない。杖を握り、祈りの言葉と共に呪文を唱えるのだ。初めの頃は、失敗ばかりだが、そのうちに杖が自分の身体の一部のように思えてくる。そうなってくると魔法は成功します」

なるほどと呟きジェラールは少し考え。

ジェラール「父上、剣との契約は可能なんですか？」

アルベルト「剣？何故そんな事を聞く？」

アルベルトは、顔をしかめた。

ジェラルル「いえ・・・剣の方が戦闘の時、杖より有利になると思いますので。精神力が切れた時やはり有利になるのは剣です」

俺は建前上そう言ったが本心は別にあった。いや、その建前も本音なのだが・・・現代日本人だった俺は生前ゲームが趣味だった（これは記憶に残っていた）その影響もあってやはり杖より剣の方がいいのだ。どのゲームにも共通して杖よりも剣の方が攻撃力があるしなにより格好いいからだ。

アルベルト「フム・・・剣か・・・どうだろうな・・・剣と契約したメイジなど聞いたことがないからな・・・」

ジェラルル「では、試してみる価値はありますね」

しかしアルベルトは首を縦に振らなかった。

アルベルト「いや、だめだ」

ジェラルル「何故です？」

アルベルト「剣など平民が振るう物だ。貴族が振るう物ではない」

アルベルトはバツサリ切り捨てた。

ジェラルル「しかし・・・」

ジェラルルはなおも食い下がる。

アルベルト「よいか、ジェラルル。この伝統と格式を誇るトリステインでその様な事をしてみる。他の貴族から白い目で見られ、侮られるぞ」

ジェラルル「ですが・・・」

アルベルト「お前はローザリア伯爵家の跡取りなのだぞ。そのことを自覚してくれ。とにかく、その事に関しては認める訳にはいかん」

ジェラール「・・・・・・・・わかりました」

ジェラールはしぶしぶ頷いた。転生者のジェラールは伝統や格式に拘りも興味もなかった。確かに古き伝統にも良いものがあるがこのトリステインは悪い所まで伝承してしまっている。そのせいで年々、国力が低下している。それに生きるか死ぬかの戦闘になれば伝統やら格式やら通用するわけがない。

ジェラール（父上も妙な所に拘りを持つな・・・・・・・・まあ、元異世界の人間と生粋のハルケギニアの人間では価値観が違い過ぎるから無理もないか）

アルベルト「フム、納得できないと言いたげだな・・・・・・・・よかろう」

アルベルトは杖を抜いて『ブレイド』の魔法を唱えた。

杖から白い光がでて、杖の周りに風が纏っていた。

ジェラール「おお・・・」

ジェラールは珍しく感嘆の声をあげた。

アルベルト「フン・・・どうだ、ジェラール？ 剣など頼らなくとも魔法を使えば剣より強靱で鋭利な刃が造れるぞ」

俺は言葉にはださず、「いや、父上、精神力が切れたら剣の方が強いでしょう」と心の中で突っ込んだ。しかし父上の言った通り魔法が強力なのは頷ける。貴族が剣を軽んじるのも無理はないと思う。

アルベルト「コホン、ちなみに私は風系統のスクウェアクラスだ」

アルベルトは軽く咳をして自慢げに言った。

ジェラール「父上は4つも系統をたせるのですか？」

アルベルト「ウム・・・スクウェアはメイジの中でも最高ランクのクラスだ」

系統魔法は4つのクラスにランク付けされている。ドットクラスが普通。ラインクラスが優秀。トライアングルクラスが一流。スクウェアクラスが超一流。ただ、これはあくまでメイジとしてのランクで戦闘となれば話はまた別だ。戦闘技術や経験でドットがトライアングルを圧倒することもある。

ジェラルド「父上、もう一つ質問があります。複数の杖との契約は可能ですか？」

アルベルトは、しばし黙考し口を開いた。

アルベルト「メイジは通常、一本の杖としか契約しない。契約を施し、手に馴染んだものでなければ呪文を唱えられないからだ。だが、器用なメイジなら可能だ。私も数人知っている」

ジェラルル（複数の杖との契約は可能か・・・杖を失った時の事を考えて念のために何本か契約しとくか・・・）

などと考えてたら。「まずは一本から契約しろ」とこちらの考えを見透かされた。

アルベルト「さて、質問はもうないかな？」

ジェラルル「はい」

アルベルト「では、杖を選びなさい」

アルベルトに促されてジェラルルはテーブルの上の杖達を見渡した。

ジェラルル（ウ・・・ム・・・どれにしようか・・・迷うな・・・
とは言っても3歳児の身体にはスタッフやメイスは長過ぎて使い辛いな・・・使い易いと言えばワンドのような短い杖だが・・・）

ジェラルルが杖を覩て迷っていると一本の杖（？）に目が停まった。しかし、それは杖というより剣の持ち手の部分だけだった。例えるなら、機動戦士ガ○ダムのビームサーベル、スターウ○ーズのライトセイバーだ。その持ち手には装飾が施されていた。長さは、全長30 سانت、材質は、ミスリル銀、柄の形はドラゴンの尾の形で尾の先端にはクリスタルが埋め込まれ、鐐の形はドラゴンの翼、鐐本はドラゴンの顔になっており、口には宝玉がくわえられていた。ジェラルルは無意識の内に自然に惹かれるようにその杖（？）を手にした。

アルベルト「ホウ・・・その杖に目をつけたか・・・」

アルベルトは興味深そうにジェラルルを見た。

ジェラルル「エッ？・・・アア・・・はい、ちょっと気になりました」

ジェラルルは不意を突かれ、動揺した。それだけこの杖に心を奪われていた。

アルベルト「フフ・・・その杖はな、初代ローザリア家当主、つまりこの家の始祖が使っていたものだ」

ジェラルル「初代が？」

アルベルト「ウム。初代当主は元々は下級貴族の出でな。『ブレイド』の名手だった。その実力は王国一、いや、ハルケギニア一と謳われていた。御前試合に出れば騎士を百人抜き、亜人討伐に行けばオーク鬼千匹を退治、戦争になれば敵兵一万を殲滅、聖戦にも参戦しエルフを十人も倒したそうだ。数多くの武功によりこのローザリア領と男爵位を時のトリステイン王より下賜されたのだ」

ジェラルル「まるで、『烈風のカリン』みたいですね」

烈風のカリンとはこのトリステイン王国の魔法衛士隊マンティコア隊先代隊長であり数多くの武功を残した騎士である。噂では男装の麗人で実は女性らしい。ジェラルルも母アリシアよりおとぎ話がわりに数多くの武勇伝を聞かされていた。

アルベルト「ウ、ウム・・・そうだな」

ジェラル「？」

アルベルトが『烈風のカリン』という名前を聞いて怯えているのを見てジェラルは怪訝な表情を浮かべた。

アルベルト「そ、それはともかく、その杖と契約するつもりか？」

ジェラル「はい」

アルベルト「そうか・・・だが、その杖は・・・」

アルベルトは困ったような表情を浮かべ頭を掻いた。

ジェラルル「何か問題でも？」

アルベルト「実はな、その杖と契約できた者は歴代のローザリア家当主の中で一人もいないのだ。私を含めてな」

ジェラルル「一人もですか？」

アルベルト「ウム、初代の息子である二代目も、それ以降の当主達も、皆、挑戦したが全員、失敗に終わった」

ジェラルル「・・・」

アルベルト「私も初代に憧れて3ヶ月程、挑んだが駄目だった」

ジェラルル「・・・そうですか・・・」

俺は迷った。

契約が不可能かもしれない杖に挑戦するよりも契約しやすい杖に換えた方がいいんじゃないかと。そんなふう迷っていたら父が・・・

アルベルト「・・・まっ、無駄だとわかっていて挑戦するのも悪くないだろう」

ジェラルル「えっ？」

アルベルト「ジェラルル、お前はまだ子供なのだ。時間は充分にある。気長にやればいい・・・
それにまだ失敗すると決まった訳じゃない。お前は普通の子供とはどこが違う。もしかするとお前なら契約できるかもしれない」

父にそう言われ、俺は（そうだな・・・そう逸らなくてもいいか・・・）と心の中で呟いた。

ジェラルル「そうですね。少しでも可能性があれば試す価値はありますからね。挑戦してみます」

相変わらずの無愛想だが声は心なしか弾んでいた。
アルベルトはそんなジェラールを見て「そうだな」と苦笑しながら言った。

アルベルト「契約する時の呪文は『ロック』や『アンロック』のよ
うな簡単なコモンマジックがよからう」

父はそう言ったが俺は最初に唱える魔法は、既に心の中で決めていた。

アルベルト「まっ、気長に根気良く頑張りなさい」

ジェラール「はい」

杖との契約／其の二

父の執務室を退室し、自室に戻った俺は、早速、杖と契約しようとした。

ジェラルル「父上は、『ロック』や『アンロック』と言ったが・・・やっぱり、最初に覚える魔法は『ブレイド』だな」

ジェラルルが何故『ブレイド』を最初に覚える事に拘っているかというのと、やはり、父、アルベルトの『ブレイド』が印象深かったからだ。

この屋敷に居て、魔法は、何度も見た事はあったし最初は驚いたが、やはり先程の父、アルベルトの『ブレイド』が一番印象深く、目に焼き付いていた。

それに、この杖の形を見ていると、どうしても『ブレイド』でなければいけない気がした。

・ ビームサーベルやライトセイバーのイメージが強いからだろうか・

ジェラルル「よし、始めるか」

俺は一度、深呼吸し、杖をしっかりと握って『ブレイド』の呪文を唱えた。

魔法は集中力とイメージが一番肝心だ。

ジェラルル（・・・しかし、父上の『ブレイド』は風系統の『ブレイド』だった。俺は、まだ、どの系統かわからない・・・どの系統をイメージすれば・・・）

俺は考えた末、ビームサーベルやライトセイバーのイメージにした。テレビや映画で見た映像をイメージし、呪文を唱えた。そして、2時間程たったが・・・
・・・全く、反応も手応えもなかった。

ジェラルル「やはり、一筋縄じゃないか・・・」

軽くため息をしているとドアがノックされた。

ヴィクトリア「ジェラルル様、昼食の時間です」

ジェラール「ああ、今行く」

丁度、昼食の時間になったので気分転換と休憩を兼ねて一息つくことにした。

アルベルト「調子はどうだ？ジェラール」

ジェラール「・・・中々、旨くいかないですね」

アルベルト「フフ・・・まあ、今日始めたばかりだからな。あまり、こんを詰めすぎないようにしなさい」

アリシア「そうよ。あまり無理しないでね」

ジェラール「はい」

俺は昼食を食べ終え、再び自室に籠り、一心不乱に『ブレイド』を唱えた。

夕食の後も、一心不乱に『ブレイド』を唱えた。

しかし、一向に魔法が発動する様子はない。気づけば、既に就寝時間、間近だ。

ヴィクトリア「ジェラール様、そろそろ寝る時間です」

ヴィクトリアがドアをノックし、声を掛けてきた。

ジェラール「ああ、わかった」

今日はこれ以上やっても成果が出ないと判断し、就寝に着いた・・・
・・・しかし。

ジェラール「寝られん」

ベッドに入って目を瞑ったが全く眠れる気がしない。

やはり、どうしても枕元にある杖が気になる。俺はこのまま、目を瞑っていても眠れる気がしないのでベッドから出て杖との契約を再開した。

ジェラール「・・・クソツ・・・ダメか・・・」

だが、一向に魔法が発動する気配がない。

再開して既に6時間以上経っている。外はもう薄明るくなっていた。夜明けまであとわずかだろう。

正直、集中していたので疲れは感じなかったがいつまで経っても契約出来ないのでイラついていた。

ジェラール「・・・さて・・・どうしたものか・・・」

気持ちを落ち着かせるため一旦、杖を机の上に置いて、ベッドの上に腰掛けた。

ジェラール「・・・何がいけないのだろう・・・」

独り言を呟き思案する。簡単なコモンマジックで契約すべきか。時間をかけて焦らず、じっくり契約するか。他の杖で試してみるか。様々な方法を思案しながら机の上に置かれた杖を見つめていると杖が「お前は俺と契約するに値する人間か？」と、問われているような気がした。無論、杖がそんな事言う訳がないが、何故かそんな気がした。

さらに見つめていると「ここで、自分のやり方を諦めるならそれでいい、それがお前の限界だ」と鼻で笑われたような気がした。

ジェラルル「・・・面白い・・・」

そうまで言うならやってやろうじゃないかと意気込んでベッドの上から立ち上がり杖を手にとった。

杖を剣道の正眼の構えのように持ち、目を瞑り集中した。

ジェラルル（魔法はイメージが大切だ。例えばモデルが架空の映像世界のものでも強く思い描けばいい。ビームを魔力とし、それを圧縮、剣のように固定すればいい。対象物を斬った時その斬り口は熱ダレをしているイメージを持て・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・『ブレイド』）

静かに目を開けると緑色のビームサーベルが出ていた。

ジェラール「……………出た……………これが……………俺の……………『ブレイド』……………」

呆然としながらジェラールは言葉を出した。その時、日が昇り、日射しが窓から入り込みその光はまるで一人の戦士の誕生を祝福しているみたいだった……………

杖との契約く其の三く

しばし『ブレイド』を見ながら呆然としていたが我にかえりこれからどうするのか考えた。

ジェラルル（・・・杖との契約が成功したのか？コレ？ 『ブレイド』？も出たし・・・成功でいいんだよな・・・・・・・・・とりあえず父上達に聞いてみるか）

自分が杖との契約に成功したか半信半疑に思いながらジェラルルは自室を出てダイニングルームに向かった。 勿論 ライトセイバーを出しながら・・・

ジェラルル「父上！」

珍しくというか初めて息子ジェラルルの大声を聞いた父アルベルトと母アリシアは目を丸くして驚いた。

アルベルト「どうした？ジェラルル大声を出し・・・」

アルベルトはジェラールが持っている杖を見て言葉を失った。

アルベルト「お前・・・それ・・・どうしたんだ!？」

ジェラール「父上　これは『ブレイド』なのですか？」

アルベルトは驚きながらジェラルルのそばに寄り『ブレイド』を凝視した。

アルベルト「判らん・・・こんな『ブレイド』見た事がない・・・
　　とかジェラール、お前、杖と契約出来たのか!？」

ジェラール「はい　多分出来たと思うんですが・・・」

アルベルト「・・・・・・・・」

自分自身、確証の持てない返事をする息子にアルベルトも啞然とした。まさか先代達が契約できなかった杖を息子が契約してしまうとは、しかもたった1日で・・・

アリシア「マア・・・変わった『ブレイド』ね。こんな綺麗な『ブレイド』初めて見たわ。流石、ジェラール私の息子ね」

夫と息子とは裏腹にどこかのんびりとズレた観点で嬉しそうに言うアリシアの言葉にアルベルトとジェラールはなんとなくどんよりした。

ジェラール「・・・父上とりあえず試し斬りしたいのですが」

アルベルト「おお・・・そうだな」

3人は朝食を後回しにし、中庭に出た。

アルベルト「よし ジェラールこれで試し斬りしてみるがいい」

そう言ってアルベルトが『レビテーション』で持ってきたのは高さ1メートル、幅50センチの岩だった。

ジェラール「はい」

ジェラールは返事をし、『ブレイド』を構え振り降ろした。岩は真つ二つに割れ、斬り口は熱ダレをおこしている。

アルベルト「おお・・・」

アリシア「まあ・・・」

アルベルトとアリシアが感嘆の声をあげているが対照的にジェラルは難しい顔していた。

ジェラルル「・・・父上　やはりこれは『ブレイド』なのでしょう
か？」

アルベルトは「フム」と呟き、杖を引き抜き『ブレイド』に『ディ
テクトマジック』をかけた。

アルベルト「・・・魔力は感じるな・・・おそらく魔力そのものを
放出していると思う・・・しかし、緑色の魔力は初めてみるな」

ジェラルル（ビームサーベルやライトセイバーをイメージしたから
かな・・・）

得意な系統によって魔力の色は違う。火の系統は赤。水の系統は青。
風の系統は白。土の系統は茶。

アリシア「なににせよ魔法が成功して良かったじゃないですか。確
かにこんな『ブレイド』は初めて見ましたけどこれはこの子だけの

『ブレイド』です。だから自信をもって胸を張りなさい。ジェラル

二人が考えの深みに嵌まっているの察したのかわからないがアリシアが優しく言葉をかけた。

アルベルト「そうだな。お前は先代達が契約できなかった初代の杖と契約出来たのだ。しかもたった1日で。お前はもしかすると初代ローザリア家当主のように立派な貴族になるかもしれない。そうだから、こうしてはおれん。ジェラルが杖の契約を成功させた祝いをしよう」

アリシア「そうね。いっぱい御馳走を用意しましょう」

アルベルト「ウム ああそうだ 魔法を教える教師を手配しなければ・・・」

アルベルトとアリシアは嬉しそうに話ながら屋敷の中に入っていた。

ジェラルル「・・・俺だけの『ブレイド』か・・・・・・・・・・？」

ジェラルルはそう呟き急激な眠気に襲われた。

ジェラルル（・・・そう・・・いえば・・・一睡・・・も・・・して・・・いな・・・かつ・・・）

ジェラルルはそのまま倒れ深い眠りについた。

麒麟児（前書き）

今回の地震の被災者の方々に心よりお見舞い申しあげます。
一日も早い復興をお祈りします。

麒麟児

ジェラール「ユビキタス・デル・ウィンデ……」

ジェラールが『偏在』の呪文を唱えると4体の分身、ジェラール本人をいれると5人のジェラールが現れた。

アルベルト「おお………」

？「見事です」

父アルベルトは驚き感嘆の声を上げ、魔法の師であるヴァルデイスは表情は驚きもせず変わらないが感無量の声で生徒であるジェラルを褒めた。

ジェラール「……………フウ……………」

ジェラールは一息吐き『偏在』を解除した。

アルベルト「しかし驚いたぞ。まさか全系統スクウェアクラスどは……………」

ヴァルデイス「私も驚いています。本来メイジが持つ得意系統は一つだけですから」

杖との契約から4年の月日が経った。ジェラールは杖との契約の数日後、早速魔法の修業を開始した。現代日本人だったジェラールはゲームや漫画等の架空の世界にしかなかった魔法という特殊能力を使えるという事に内心喜び魔法の修業にのめり込んだ。それこそ三日三晩、不眠不休、一心不乱に魔法の修業に打ち込んだ。師のヴァルデイスや両親、屋敷の使用人達が強引に止めても、精神力が切れて気絶しそうになっても…………その修業はまさに鬼気迫るものだった。その結果最初の1年でドットクラスの魔法を覚え、2年目でラインクラスの魔法、3年目でトライアングルクラスを修得し、4年でスクウェアクラスをマスターした。

ジェラール「大佐の指導のおかげです」

ヴァルデイス「いえ、ジェラルル様の努力の賜物です」

俺は師のヴァルデイスのことを大佐と呼んでいる。大佐は元々ゲルマニアの貴族で本名はヴァルデイス・フォン・ヴァインベルグと言う。ゲルマニア陸軍の大佐で慎重で堅実な優秀な指揮官だったが陰謀で国を追われトリストインに亡命したところを父に助けられた。その陰謀で男爵位と妻を失った。現在、家族は15歳の息子と12歳の娘が一人ずついる。仕事の激務か、はたまた陰謀のためか金髪だった髪がストレスでまだ40歳にもかかわらず真っ白に成り果ていた。それでも190センチの身長、引き締まった逞しい筋肉とキリッとした凛々しい顔立ち整えられた口髭を生やし、まさにダンディーで格好いい男性だ。現在はローザリア家の護衛隊長と領地の治安維持の指揮を執っている。父も絶対的な信頼を持っている有能な人物で俺も彼の事を信頼し尊敬している。

アルベルト「しかし、わずか7歳で努力だけでは全系統スクウェアクラスにはなるまい。やはりお前には天賦の才があるのだよ」

ヴァルデイス「私もそう思います。まるでガリアのシャルル・オルレアン大公殿下のようです」

アルベルト「ウム」

父と大佐はああ言ったが俺自身才能があるかどうかよくわからなかった。ただ魔法を学ぶ事が面白くのめり込んだ結果、全系統スクウエアクラスになってしまっただけだ。そりゃあ巧くいかず行き詰まる事も多々あったがその難しさがかえって俺にヤル気を生み出したからあまり魔法の修業は苦に感じなかった。ちなみにシャルル・オルレアン大公殿下という人物はガリア王国の第二王子で12歳でスクウェアクラスになったという魔法の天才である。

アルベルト「しかし、ジェラルルのあまりの才能に魔法の修業ばかりさせていたが貴族としての礼儀作法やたしなみ等を教えるのをすっかり忘れていたな……よし、明日からはそのあたりをきっちり教えねばならんな」

ジェラルル「……………」

父のその言葉を聞いて俺は何故か嫌な予感がした。

貴族としての才能

ジェラルル「……………」

今、俺は黙々と小説を執筆している。題名は《ファイナルファンタジー》だ。内容はその題名通り有名ゲームのシリーズを小説化しようとしている。勿論、ゲームの内容をそのまま書くつもりはない。ゲームの中に出てくる主要なものを使いオリジナルのシナリオを書くつもりだ。例えば、王国と帝国、武器や防具、モンスターや召喚獣、アイテムと魔法、クリスタルや飛空艇等、ファイナルファンタジーシリーズに出てくるお馴染みの題材を使って書いていく。一応？…？を主体にするつもりだ。

何故、俺が小説を執筆しているかというと……あの苦痛にしかない貴族の礼儀作法という地獄の訓練の時間から現実逃避するためだ。

魔法の訓練が終わり翌日から貴族の礼儀作法の訓練が始まって2ヶ月近く経った。その2ヶ月近くの訓練で俺が悟ったのは俺に貴族としての才能があまり無いという事だ。

ジェラルル「…フゥ…」

軽くため息をついて筆を机の上に置き眼を瞑り今までの訓練を思い出す。

食事の際のマナーは至って普通でこれといって問題はなかった。問題があったのは社交時のマナーだった。現代日本人だった俺は気品があり優雅な仕草というものがどうしてもできなかった。どうやってもギクシャクし堅苦しく肩肘張った軍人のような仕草になってしまう。メイドのヴィクトリアはそれを見て諦めたようなため息をつき、父アルベルトは頬をひきつらせ苦笑いを浮かべた。母アリシアは一人「やっぱリジェラルは可愛いわね」と微笑んでいた。

次にダンスだ。ダンスは貴族にとって欠かせない社交の一つだ。貴族がダンスの一つもまともに踊れなければ馬鹿にされ恥を搔いてしまう。ダンスに関してもかなり苦労した。習い始めた頃は、母に素敵な笑みで「照れがあるわね」と指摘され何度もやり直しをさせられた。必死の練習で最近では「中の下くらいかしら」と満面の笑顔で酷評を頂いた。

だが、ダンスならまだいい方だ。一番最悪なのは乗馬だった。最初の馬に騎乗する時点でどういう理由か馬が俺を見て怯え暴れてしまうのだ。なんとか馬を宥め落ち着かせて騎乗してもやはり怯えて暴れだし、ロデオマシンのようになってしまい、俺は腰、尻、股間の〈3K〉を痛めつけられ、その結果トラウマになり馬に騎乗できなくなってしまう。以来、俺と馬は互いに理解しあえない大敵となった。馬車の時は馬も怯えないでなんともないんだが何故だろう？最後に音楽だが音楽はこれまでの中で一番最高だった。特にピアノやヴァイオリン等の楽器は屋敷にいる人間全てを魅了するものがあった。試しにバッハのG線上のアリアをヴァイオリンで弾いてみたら部屋に屋敷中の人間が集まり皆、感涙を流していた。曲を弾き終わってすぐに満場の拍手を受け俺は驚いた。まさか自分の拙い演奏でここまで感動されるとは思わなかったからだ。前世で音楽が趣味で特技だったのは憶えていたのが幸いした。ジャンルはそれこそ幅広くクラシックからロック、ユーロビート等様々だ。自分としては本当はバンドを組んでロックをやりたいのだがこの世界にはメンバ

ーもギターやベース、なにより電気というものがない。だがこの世界には魔法というものがある。いずれこの魔法を使ってライブを実現させてみるつもりだ。ハルケギニアの人間がロックを理解できるかどうかかわからないが……いや！できる！！音楽は万国共通語！！必ず理解できる！！……話がそれてしまった。前世でバンドをやっていたせいであつて熱くなつてしまった。話を戻すが満場の拍手を受けた後、母にえらく褒められ「ねえ、ジェラル。今の曲なんという曲なの？」「もう一度やってみて！」等の多くの質問やリクエストを受け、その日、1日中、様々なクラシック曲を演奏するはめになった。俺も演奏するのが嫌いではないので演奏したが……流石に疲れた。父と母は今度、近隣の領主やその夫人を集めて発表会をするといきまいていた。どうやらその発表会で息子の俺を自慢するらしい。

一通り今までの訓練を思い出し眼を開け再び筆を執ろうとしたらドアをノックする音が聞こえドアの方をしかめ面で睨んだ。

ヴィクトリア「ジェラル様、作法のお勉強の時間ですよ」

メイドのヴィクトリアの呼ぶ声で現実逃避の時間が終わりを告げた。俺は「わかった」と一言告げ憂鬱な気分で部屋を出て地獄に赴いた。

領地経営

トリステイン王国ローザリア伯爵領。トリステイン南西部、ガリアとの国境沿いにある120アルパン程の領地。北と西が海に面し東と南は森に囲まれている辺境の土地。人口は約6千人。宿場町や漁村、農村それにいくつかの部落があり年収は6万2千エキュ。そのローザリア領、現当主アルベルトは自身の執務室で頭を抱えていた。

アルベルト「ウウム……」

現在、この領地で問題が続発していた。

町に流行り病が発生し、農村は年々、作物が不作して収穫量が減っていき、漁村は魚貝類の捕れる量が減少していった。

アルベルト「これで盗賊団や亜人、幻獣の襲撃があったら目もあてられんぞ……」

アルベルトは一人ぼやいた。

アルベルトは元々魔法衛士隊のグリフォン隊に所属していたが先代当主が急死したため、衛士隊を辞め、ローザリア領と伯爵位を継い

だ。

先代が急死してしまったため録に領地経営を学ぶ事が出来ず、今日までできてしまった。結果、借金が年々徐々に増えていき知らず知らずの内に経営が傾き苦しくなっていた。アルベルトは騎士としては才能があり優秀だが領主としては無能だった。最初の内は家臣達もなんとか支え頑張ってきたがそれも限界がきたようだ。このままではローザリア家が潰れてしまうと頭を悩ませた。

悩んでいる最中、部屋のドアがノックされた。

アルベルト「入れ」

ジェラルル「失礼します」

そこに入って来たのはアルベルトの一人息子ジェラルルだった。相変わらず無愛想のムツツリ顔だ。

ジェラルル「ファイナルファンタジー父上の第二巻が完成しました」

アルベルト「おお　そうか！　見せてくれ」

アルベルトは喜びながら本を受け取った。アルベルトは別に本を読みたくて喜んでいる訳ではない。ジェラルルの書いた小説がトリスティンで人気を呼んでいたからだ。現実逃避のために書いていた本をたまたま母アリシアに見られて「この物語凄く面白いわ。ねえジェラルルこの本、出版してみない？」と言われなんとなく売りに出したら徐々に売れていき再発行の申し出や続編のリクエストが多数あった。そのためアルベルトにとって《ファイナルファンタジー》はローザリア家の大事な資金源だった。

アルベルト「ウム やはりお前の書いた小説は面白いな」

アルベルトは感心しながら感想を洩らした。

ジェラルル「ありがとうございます」

変わらず無愛想な顔で返事を返すジェラルル。

アルベルト「お前は魔法だけでなく音楽や物書きにも才能があ……」

アルベルトは感心しながらフと思った。魔法や芸術の才能があるのなら領地経営の才能はどうなのだろう？貴族の礼儀作法の才能はあまりなかったが領地経営の才能はあるんじゃないだろうか。どの道ジェラルルはローザリア伯爵家を継がなくてはならない。ならばここで試してみるのもいいだろう。

アルベルト「ジェラルル 実はな……………」

アルベルトはジェラルルに今現在の領地の経営状態をできるだけ詳細に説明した。正直アルベルト自身8歳の息子に領地の事を話しても何かが変わるとは思わなかったが心のどこかで「この子ならなんとかできるんじゃないか」と思った。この子は他の子供と違いどこか聡明だ。どこか大人びていて時々、子供だという事を忘れてしまう時がある。

ジェラルル「……………」

ジェラルルはうつむいてしばし黙考し顔を上げ頷いた。

ジェラルル「わかりました。早速、明日から領地を視て回りましょう」

アルベルト「おお　そうか。何かいい名案が浮かんだんだな。よし、明日は私も同行しよう」

こうしてジェラルルの領地見回りが決まった。ジェラルル自身屋敷の敷地内から出るのが初めてで嬉しかったが感情を表に出すのが下手なので変わらぬ無愛想顔だった。

ミルザループの町ゝ其の一ゝ（前書き）

お久しぶりです。更新が遅くなった上に短いです。すみません。

ミルザループの町ゝ其の一ゝ

ミルザループの町。ローザリア伯爵領の中央に位置する人口4900人程の宿場町。ローザリア伯爵領で唯一の町にジェラル達は馬車で移動している。屋敷から徒歩で1時間位かかるため馬車でその町に向かっている。本当は馬に乗って走らせればもっと早く着くがジェラルが馬に乗れないため馬車にした。アルベルトはジェラルをフォローするためかどうか分からないが「貴族は馬車で移動するのが常だ」と言っていたが・・・

現在、馬車には4人乗っている。ローザリア家現当主のアルベルト、その息子ジェラル、護衛隊長のヴァルデイス、それから馬車の御者兼護衛隊士のファバルだ。ファバルはローザリア伯爵家に仕える下級貴族で年齢は21歳の独身で水のトライアングルクラスだ。

アルベルト「それで、ジェラル、町の流行り病に対して何か対策はあるのかね？」

ジェラル「詳しい事は実際、町の様子を見てみないとなんとも言えませんが町に着いたら病人達を集めて欲しいのです。病人達を治すのが先決ですから」

アルベルト「わかった。だが治すには大量の水の秘薬が必要だな」

アルベルトは難しい顔になった。

ジェラルル「金の問題ですか？」

ジェラルルはアルベルトの難しい顔で金の事を察した。現在ローザリア家はかなりの借金を抱えていた。クルデンホルフ大公国にそうしたの借金があり、さらに借金しなければならぬ事を悩んでいるのだろう。

ジェラルル「金の問題については対策はありますので心配しなくても大丈夫です」

アルベルト「本当か!？」

ジェラルル「はい。それに水の秘薬に関してもそれほど心配はないかと思います」

アルベルト「どういう事だ？」

ジェラルル「川や井戸にある水を使って『ヒーリング』の魔法を使おうと思います。大佐、町に着いたら水の用意をお願いします」

ヴァルデイス「わかりました」

アルベルト「……………」

アルベルトはジェラルルの言葉に絶句した。いくら全系統スクウェアアクラスでも町にある水を使って『ヒーリング』の魔法を使用したとしても無茶だと思った。しかし、ジェラルルは他の人間とは違うと思い直し何も言わなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3463q/>

ハルケギニアで逞しく生きていく

2011年5月11日21時06分発行